

『現代中国論』の衝撃―中嶋嶺雄著作選集第一巻に寄せて

拓殖大学総長

渡辺

利夫

「最高傑作は大抵が処女作である」という趣旨のエッセイを読んだ記憶がある。誰が書いたものだったかは忘れてしまったが、確かにそうなのであろう。関連する諸文献のすべてを渉猟し自分自身の問題意識を磨き上げ、それをようやく他者に伝えたいという意欲を沸き立たせて著すものが処女作―少なくとも社会科学における―なのであろう。生涯を賭けての研究の原型はその中に鮮明に表出されるといつていい。

中嶋嶺雄著作選集の第一巻を、氏の処女作である1964年の『現代中国論』と文化大革命（文革）の本質に迫った氏の最初の論文とから構成したことは、編者の慧眼だといわねばならない。確かにこの巻には、中嶋氏のその後の歴大な中国政治研究の枠組みとキーワードのほとんどが網羅されている。氏がこの処女作によつて国際政治研究や国際関係論における論壇の一角を占めたのも、いま読み返してみれば当然のことであつたような気がする。確かにこの一作には、往時の日本の知識人の中国認識を一変させるパワーが漲つていた。

いまの日本の若手の知識人には実感をもつて理解しがたいことであろうが、中嶋氏が処女作を世に出した頃の日本は左翼全盛時代であつた。青春時代をこの頃に送つた私には、当時の日本を覆つていた社会的思潮が皮膚感覚で理解できる。ソ連共産主義に傾倒していた多くの知識人が「スターリン批判」に狼狽する一方で、中国の共産主義と文革の中に新しい思想的活路を見出し、幻想の中国像にのめり込んでいった時期である。魂にふれる人間的な革命などといった歯の浮くような表現で語られていた通俗的な文革イメージを中嶋氏は完全に否定した。むしろ、文革を中国の権力闘争の窮極のものだという判断を日本の論壇人の中で最初に強いインパクトをもつて提供した人物が中嶋氏であつた。中嶋氏が鋭敏な現実感覚と真の勇氣をもつ知識人であつたことを、著作選集第一巻を通じて読者にはもつと知ってほしいと思うのである。